シンポジウム報告

フランス語学と意味の他者

日　時：2010年5月29日（土）10：00－12：30
場　所：早稲田大学（早稲田キャンパス）1号館4階401教室
パネリスト：野矢茂樹（哲学）
　　西村義樹（認知言語学）
　　渡邊淳也（フランス語学）
コメンテーター：守田貴弘（対照言語学）
企画・司会：酒井智宏（言語学）

はじめに

酒　井　智　宏

> [...] なんの変テツもない仲間内に引きこもっちゃ，だめだ．変なものに，変なことに，変なひとに，出会う．そのときにこそ，それを「変だ」と感じる自分自身とはじめて出会える．
> そこに，考えるという場が開かれる．[1)]

フランス語学と野矢茂樹．フランス語学と西村義樹．企画した人間が言うのも気が引けるが，なにやらお刺身の上にあんこやチョコレートを載せたようである．現在のフランス語学はこの二人の変な他者を理解するための論理空間を持ち合わせていない．「そんなものは食べられない」と醒めた態度を取る人もいるかもしれない．しかし私には，この二人の変な他者は「私に意味を与えてみよ」[2)] という「謎として，挑戦として，そして誘惑として」[3)] 我々の前に現れているように見える．それを「刺身の上のあんこやチョコレート」といった，

1) 野矢茂樹（2004）『はじめて考えるときのように—「わかる」ための哲学的道案内』PHP文庫，pp.206-208.
2) 野矢茂樹（2005）『他者の声・実在の声』産業図書，p.104.
3) 同.

既知のものの組み合わせで理解しようとする態度自体が間違っている．「意味の他者を理解するとは，自分自身が，その論理空間が，変容すること」[4] なのである．

フランス語学の論理空間の変容に「内側から」立ち会うのは渡邊淳也さんである．野矢茂樹，西村義樹，渡邊淳也の三氏を結びつけるものは何だろうか．それは冠詞論でもなければ時制論でもない．取り組むべき問いの同一性はそこにはない．三氏を結びつけるのはまさに「意味の他者」に対する態度であり，新たな問いを問おうとする態度である．それぞれの意味の他者を前にして，新たな問いを問い，答えを求めて日々格闘する．そしてその格闘を本気で面白いと感じる．その態度を共有しているのである．私にはその態度こそが「幸福に生きよ！」[5] の実践として映る．格闘している本人が本気で面白いと思っている格闘がどれほど魅力的であり，どれほど人を幸福にするか．それを肌で感じ取ってもらいたい．「揺さぶられて，考えるようになる」[6] 喜びを味わってもらいたい．外からの揺さぶりに，フランス語学はどう答えるのか．あるいは答えられないのか．

そんな思いでこのシンポジウムを企画した．テーマを決めてパネリストを決めるのではない．とびきりの場違いなパネリストをお招きして，好きなことを話してもらう．言語に関して何が問題になりうるのかを問題にしてもらう．そして，これまた場違いな大勢の聴衆の前で，フランス語学会の新進気鋭の研究者２名がそれに立ち向かう．そんなシナリオを思い描いた．パネリストの人選には３秒もかからなかった．あとは，引き受けてもらえるかどうかだ…あのときの緊張感は今もはっきりと覚えている．

野矢さんには言語によって世界が作られる瞬間を疑似体験させていただいた．言語は世界を描写するだけではない．言語は，物語を開くことによって，世界の相貌を作るのである．世界の相貌を作る言語表現がメタファーにほかならない．表現Ｅの字義通りの意味は M_1 である．Ｅはメタファー的意味 M_2 を持つ．M_1 と M_2 の関係は…言語学者はそのように語り出す．そこでは M_1 と M_2 がすでに与えられている．野矢さんの言葉を借りれば，言語学者はメタファーの化石を研究している．それが悪いとは言わない．しかし，言語が言語

4) 同書 p.106.
5) WITTGENSTEIN, Ludwig (1961), *Notebooks 1914-1916*, Basil Blackwell, 奥雅博（訳）「草稿 1914-1916」『ウィトゲンシュタイン全集 1』，大修館書店，1916 年 7 月 8 日.
6) 野矢茂樹（2004）『はじめて考えるときのように―「わかる」ための哲学的道案内』PHP 文庫，p.206.

自身について開く物語はそれだけではない．世界の新たな相貌を作り出す新たな物語として，M_2 が語られなければならない．

西村さんはメトニミーの遍在性についてお話しくださった．その過程で，はたしてメトニミーは世界の相貌を作るのか？メタファーより創造性において劣るのではないか？という問題が浮上した．いや，創造的なメトニミーもある．「太郎は花子に泣かれた」という日本語の迷惑受身は，花子が泣くという平凡な事態を太郎に迷惑をかける事態として創造的に描き出すメトニミーにほかならない．こうしてフロアを巻き込んで議論が始まった．会場に笑いと興奮の渦が巻き起こった．

当学会に活気を与えてくださった野矢さんと西村さんには心から感謝の気持ちを伝えたい．お二人は当初のもくろみ通り「場違い」なパネリストであったが，野矢さんの言うように「間違い」ということはなく，まさしく大正解であった．

活気ある議論に参加してくださった方々はもちろん，会場に足を運んでくださった（壇上の人数を除く）72名すべての方々にお礼を申し上げたい．シナリオどおり，フランス語学会会員でない皆さんにも大勢集まっていただけて，とてもうれしかった．

人前で身内を褒めるのはあまり好きではないが，強敵を前にした渡邊さんと守田さんの奮闘は目覚ましかった．当日も述べたことであるが，特にフランス語学会の若い会員には，渡邊さんと守田さんが討ち死にしたと仮定して，その骨を拾い，その遺志を継いで戦える研究者になってもらいたい．それがこのシンポジウムの残した大きな宿題である．「哲学者との戦いに敗れた言語学者の骨を拾って代わりに戦うのは言語学者の仕事ではない．」「英語学者との戦いに敗れたフランス語学者の骨を拾って代わりに戦うのはフランス語学者の仕事ではない．」言語学者・フランス語学者に時折見られるこうした「線引きドグマ」は捨て去られなければならない．

最後に，フランス語学会会員でないにもかかわらず，シンポジウムの準備と運営のために不眠不休で働いてくれた裏方さんたちにありがとうを伝えたい．彼らの存在なくしてこのシンポジウムはありえなかった．

緊張はしたが，楽しかった．このシンポジウムはそんな小学生のような感想でお開きにするのがふさわしい．

（跡見学園女子大学）